琉球大学学術リポジトリ

「『共感覚的比喩』の一方向性仮説」における反例の検証と課題
―７つの言語を対象とした「視覚を表す語」に関する予備調査の結果から―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学留学生センター
	公開日: 2008-07-28
	キーワード (Ja): 共感覚的比喩, 一方向性仮説, 視覚を表す語, 意味の転用, 言語普遍性
	キーワード (En): Synesthesia metaphor, One direction hypothesis, Words indicating sight, Diversion of meaning, Language universality Phenomenon
	作成者: 酒井, 彩加, Sakai, Ayaka
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6789

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育 第5号，2008

「『共感覚的比喩』の一方向性仮説」における反例の検証と課題
－７つの言語を対象とした「視覚を表す語」に関する予備調査の結果から－[1]

酒 井 彩 加

要 旨

「共感覚的比喩」の「一方向性仮説」(五感内の意味転用にみられる左から右への一方向性）は、これまで人間が生理学的に普遍であること等を論拠に、世界の言語共通に認められる「言語普遍性」の現象のひとつとされてきた。しかし研究が行われたのは英語と日本語のみであり、日本語の調査についても不十分なものである。従って、英語と日本語をはじめ他の言語についても本当に言語の違いを越えて共通に認められる現象であるのかどうか、十分に調査し検証する必要がある。

酒井（2003）では、現代日本語における共感覚的比喩について多数の実例に基づき検証し、日本語においては比喩の一方向性が認められないという結論を得た。そこで本調査では、この酒井（2003）での結果を踏まえ、７つの言語（中国語、アラビア語、英語、スペイン語、韓国語、タガログ語、ロシア語）を対象とし「各言語の共感覚的比喩体系には、様々な多様性が認められる」という仮説を立て検証した。要点は、以下の５点にまとめられる。

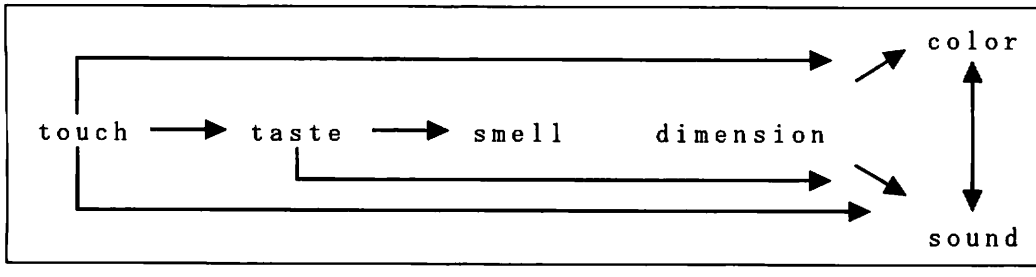
1．今回の調査で最も多く一方向性仮説に反する例が認められたのはタガログ語である。しかし、２番目に多い日本語、そして３，４番目の中国語、英語までは数値的に大きな差は無く、日本語だけでなく複数の言語においても多数の反例が存在することが明らかになった。
2．「視覚→触覚」表現については、日本語と韓国語が７言語中、最も少ないのに対し、中国語においては多くの反例が存在する可能性がある。しかし「視覚→味覚」および「視覚→嗅覚」表現と比較すると、「視覚→触覚」表現は他の言語においても用例数が少ない可能性がある。
3．「視覚→味覚」表現については、日本語が目立って多い。次いでタガログ語、英語、中国語にも比較的多くの反例が存在するが、スペイン語とアラビア語を除く他の言語においても、多くの反例が存在する可能性がある。
4．「視覚→嗅覚」表現については、タガログ語および日本語に多く用例数が認められる。英語、中国語、アラビア語、ロシア語、韓国語にも用例が認められるが、スペイン語だけは極端に少ない可能性がある。
5．７言語中、「うすい」「こい」「あわい」に相当する語においては、どの言語においても多数の転用例が認められる。一方、「あかるい」「くろい」「うつろな」「くうどうの」「ピンクの」といった語においては、今回の調査ではどの言語にも全く用例が認められなかった。

本稿全体の結論として、日本語以外の７つの言語においても数多くの反例が認められる。従って、今後他の言語についてもさらに調査すべき必要性があることが確認できた。なお本調査は、今後予定されている20言語を対象とした言語調査に先立つ予備調査である。

キーワード：共感覚的比喩、一方向性仮説、視覚を表す語、意味の転用、言語普遍性

0. はじめに

はじめに、本稿で考察する「共感覚的比喩の一方向性仮説」について簡略に説明する。「共感覚的比喩（synaesthetic metaphor）」とは例えば「甘い声」等の表現のような「ある感覚分野のことを表現するのに別の感覚分野に属する語を比喩的に用いることをいう」（国広（1989:28））。また、共感覚的比喩の「一方向性仮説」については、英語の比喩に関する研究ではじめて指摘された（ウルマン（1964）、Williams（1976）他）。このうちWilliams（1976）は、３つの辞典から用例を分析し、ある感覚モダリティを形容する語が他の感覚のモダリティの記述に転用されるようになる歴史的変化を調べ、次のように示した。



（Williams（1976），p.463. Figure 1）

この図にみられる左から右への一方向性が「共感覚的比喩の一方向性仮説」と呼ばれるものである。

1. 先行研究

共感覚的比喩の一方向性仮説に関する日本語の先行研究においても、前節で挙げた英語（Williams（1976））と「基本的には同様である」とする説が主流となっている（山田（1993）、池上（1985）、安井（1978）、国広（1989）、山梨（1988）ほか）。従来の先行研究の指摘をまとめたものが以下である。

共時的にみた共感覚→原感覚の修飾の方向性と通時的、歴史的な観点からみた五感の発達過程に、ある一定の相関関係がみとめられる（共感覚的比喩の一方向性は人間の感覚の在り方、および進化の発達過程と関係がある。）

即ち、従来の研究において、共感覚的比喩の一方向性仮説は「人間の感覚の仕組の共通性に基づいた言語普遍的な現象である。」とされているのである。

２．先行研究の問題点と本稿の課題

以上のように共感覚的比喩の「一方向性仮説」は、世界の言語に認められる現象のひとつであるという見方が主流であった。しかし研究が行われたのは英語と日本語のみであり、日本語の調査についても不十分なものである。従って、英語と日本語をはじめ他の言語についても十分に調査し、検証する必要がある。

今回の調査に先立ち、日本語に関しては既に、酒井（2003）において結果を得ている。酒井（2003）で得られた要点は以下の２点である。

１．日本語においては（嗅覚から触覚を除く）五感相互で意味の転用がみられることから、比喩の一方向性は存在しない。

２．しかし、五感と比喩との関係性において何らかの「身体性に基づく制約」の存在は示唆される。

２について簡略に述べると、日本語においては「触覚」を基本義とする語からの転用例が最も多い。これは英語の研究結果と同様である。また「嗅覚」は唯一他の感覚へ転用されない感覚領域であるが、この点についても英語と同様である。さらに「触覚」と同程度に「視覚」を表す語においても多くの転用例がみとめられるが、この点は英語と異なる。

この結果を踏まえ本稿では、「各言語の共感覚的比喩体系には、様々な多様性が認められる」という仮説を立て、一方向性仮説に反する例がどのくらい存在するのかという点について７つの言語を対象に予備調査を実施した。

なお酒井（2003）で得られた「日本語」における一方向性仮説の反例は、①「視覚」→「味覚」、②「視覚」→「嗅覚」、③「聴覚」→「視覚」、④「味覚」→「触覚」、⑤「嗅覚」→「味覚」の５種であり、特に日本語においては、「視覚」からの転用例が数多く存在する点が明らかになっている。

３．７言語を対象とした「一方向性仮説」に関する予備調査

本調査では、７つの言語（中国語、アラビア語、英語、スペイン語、韓国語、タガログ語、ロシア語）を対象とし、視覚を基本義とする語（vision17語、dimension11語、その他15語の計43語）が他の感覚へ転用し得るのかどうかについて調べた。なお「その他」の語の中には、もともと視覚的意味のみを持っていた語が現在では他の感覚の意味を中心的に表すようになったものもある。これは、Williams（1976）が通時的な研究であることによる。しかし今回の調査では、除外せず全てリストに加えた。

調査対象言語および被検者数、語のリストは、次の通りである。なお、vision（視覚）の17語、dimension（次元形容詞）の11語の選定は、楠見（1995）によるものであり、その他の語についてはWilliams（1976）を参考にしている。

表１　視覚を基本義とする語のリスト

vision（視覚）（17）	dimension（次元）（11）	その他（15）
1. あざやかな（vivid）	1. うつろな（blank）	するどい（acute）
2. かがやきのある（shiny）	2. たかい（high）	ふかい（deep）
3. あかるい（bright）	3. ひくい（low）	からの（empty）
4. くらい（dark）	4. おおきい（big）	たいらな（even）
5. くろい（black）	5. ちいさい（small）	ふとった（fat）
6. すんだ（clear）	6. ふとい（thick）	いっぱいの（full）
7. あおい（blue）	7. ほそい（thin）	くうどうの（hollow）
8. しろい（white）	8. あつみのある（thick）	すいへいの（level）
9. うつくしい（beautiful）	9. ちみつな（fine, dense）	あさい（shallow）
10. とうめいな(transparent)	10. こい（deep, thick）	きらきらした（brilliant）
11. にごった（opaque）	11. うすい（thin）	ぼんやりした（faint）
12. あかい（red）		へいたんな（flat）
13. みにくい（ugly）		どろだらけの（muddy）
14. ぼんやり（vague）		ピンクの（pink）
15. あわい（light）		みどりの（green）
16. きいろい（yellow）		
17. つやのある（glossy）		

上記のリストに基づき、中国語（２名）、アラビア語（１名）、英語（２名）、スペイン語（１名）、韓国語（２名）、タガログ語（１名）、ロシア語（１名）のそれぞれの被験者に対し、一方向性仮説の反例に関するアンケート調査を実施した。

なお、このリストには日本語と英語のみが記されていることから、その他の言語（中国語、韓国語、スペイン語、ロシア語、アラビア語、タガログ語）については「日本語（もしくは英語）→各言語」への翻訳が必要となる。そのため、翻訳の過程で間違い等が生じる可能性があり、この点について配慮が必要である。今後も引き続き、英語あるいは日本語に堪能な被験者を選出し、当該言語母語話者の複数のチェックを受けるなどして慎重に調査を進めたい。

４．予備調査の結果とそれに基づく考察

今回実施した調査の結果は、以下のようにまとめられる。表のうち、被験者がそれぞれの母語で「表現可能である」と答えた表現については、１名につき１とカウント

し、逆に不可能であるとされる表現については、０とした。また0.5については、被験者がはっきりと「可能である」とも「不可能である」とも断言できなかった表現である[2]。なお、日本語については筆者が回答した。

表２　７言語を対象とした「一方向性仮説」の反例に関する予備調査の結果
（視覚を表す語を対象に）

しかく (vision/ dimension)	てざわり・かんしょく -touch-, -touch-								あじ -taste-								におい・かおり -smell, scent-							
	日	中/2	韓/2	英/2	西/1	露/1	亜/1	タ/1	日	中/2	韓/2	英/2	西/1	露/1	亜/1	タ/1	日	中/2	韓/2	英/2	西/1	露/1	亜/1	タ/1
V1. あざやかな (vivid)									0.5		0.5		1				1	1	1		1	1		
V2. かがやきのある(shiny)									0.5															
V3. あかるい (bright)																								
V4. くらい (dark)				1								1								1				
V5. くろい (black)																								
V6. すんだ (clear)									1	1		1				1	1	1	1					1
V7. あおい (blue)				1					1	2		1					1	2						
V8. しろい (white)										1														
V9. うつくしい (beautiful)				1			1		1	1		1				1	0.5			1.5			1	1
V10. とうめいな (transparent)				1					0.5	1.5	0.5					1	1					0.5	1	1
V11. にごった (opaque)									1	1.5							0.5	1.5	1				0.5	
V12. あかい (red)																							1	
V13. みにくい (ugly)								1															1	1
V14. ぼんやり (vague)			0.5						1		0.5	1		1		1	1	1	1	2	1	1		1
V15. あわい (light)				1						2	2	1				1	1	2	2	1				1
V16. きいろい (yellow)		0.5														1								
V17. つやのある (glossy)		0.5		1		1	1																	
dimension																								
D1. うつろな (blank)																								
D2. たかい (high)		1																						

しかく (vision/ dimension)	てざわり・かんしょく -touch-, -touch-								あじ -taste-								におい・かおり -smell, scent-							
	日	中/2	韓/2	英/2	西/1	露/1	亜/1	タ/1	日	中/2	韓/2	英/2	西/1	露/1	亜/1	タ/1	日	中/2	韓/2	英/2	西/1	露/1	亜/1	タ/1
D3. ひくい (low)		1										1												
D4. おおきい (big)		1							1		0.5							1						
D5. ちいさい (small)		1		1														1						
D6. ふとい (thick)		2					0.5					1								1				
D7. ほそい (thin)		1										1		1								1		
D8. あつみのある (thick)		2	0.5				0.5		1	1		1					0.5			2				
D9. ちみつな (fine, dense)		2		2					0.5		0.5	1								1		1	1	
D10. こい (deep, thick)			0.5						1	2	2	1				1	1	2	2	1			1	1
D11. うすい (thin)		2			1		1	1	1	2	2			1		1	0.5	2	2			1		1
するどい (acute)		1	0.5		1	1	1		0.5			1	1	1	1					2		0.5	0.5	
ふかい (deep)		1		1					1	0.5	2						1	1						
からの (empty)		1							0.5															
たいらな (even)	1	2		1	1	1	1	1	1			1								1				
ふとった (fat)		1		1		1				1				1		1								
いっぱいの (full)																				1.5				1
くうどうの (hollow)																								
すいへいの (level)						1																		
あさい (shallow)									0.5															
きらきらした (brilliant)				1	1				0.5			1	1			1								1
ぼんやりした (faint)				1					1			2				1	0.5			2				1
へいたんな (flat)		0.5							1			1.5		1		1						1		1
どろだらけの (muddy)		1				1	0.5	0.5								1								1
ピンクの (pink)																								
みどりの (green)										1		1		1			0.5	1	0.5	1			1	
計	1	22	2	14	4	6	6.5	3.5	17	18	11	20	3	7	1	13	11	17	11	18	2	7	8	13

それでは、この表の結果について以下で項目別にみていく。

4.1.「視覚→他の感覚」へと転用される「一方向性仮説」の反例数

まずはじめに、どの言語に多く反例が認められたかという点についてまとめたものが次に示す「表３」である。

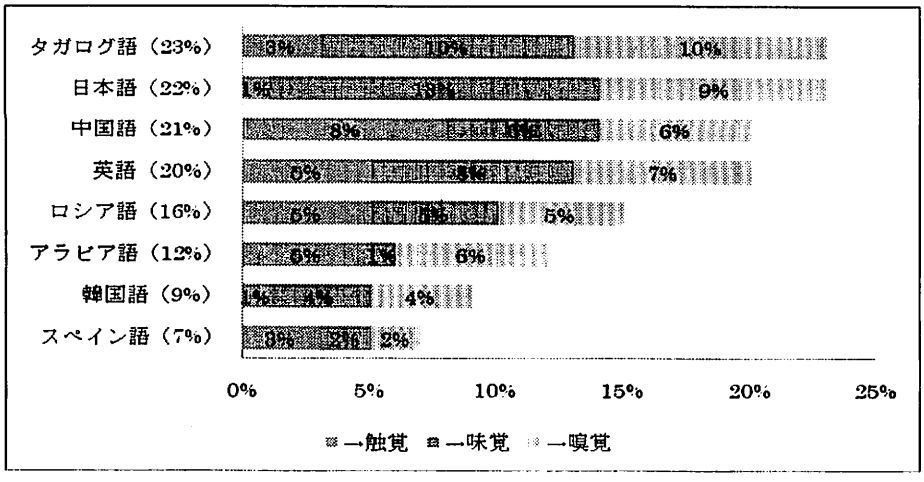
表３　「視覚→他の感覚」へと転用される「一方向性仮説」の反例数

	→触覚	→味覚	→嗅覚	用例計
中国語	21.5	15.5	16.5	53.5
英語	14	19.5	18	51.5
タガログ語	3.5	13	13	29.5
日本語	1	17	11	29
韓国語	2	10.5	10.5	23
ロシア語	6	7	7	20
アラビア語	6.5	1	8	15.5
スペイン語	4	3	2	9
計	58.5	86.5	86	231

用例数だけを見ると中国語と英語が同程度に多いが、これは被験者の相違によるものである。なお先にも述べたが、今回の調査の被験者数は、中国語と英語、および韓国語は各２名、その他の言語は各１名である。

そこで言語ごとに全用例中の反例の割合を比較するためにまとめたものが次の表４である。

表４　「視覚→他の感覚」へと転用される「一方向性仮説」の反例の割合



表の「%」は、１名もしくは２名の被験者全員が、全ての表現を可とした場合を100とし計上してある。例えば中国語の被験者２名が「視覚→触覚」「視覚→味覚」「視覚→嗅覚」の全ての表現を「表現可能である」と答えた場合は、%が100となる。被験者の数が１名の言語についても同様に、その１名が全ての表現を「可能である」と答えた場合は100%となる。

この表４から、今回の調査で最も多く反例が認められたのはタガログ語である。しかし、２番目に多い日本語、そして３，４番目の中国語、英語までは、数値的に大きな差は無いことがわかる。逆に、韓国語、スペイン語においては、反例があまり多く存在しない可能性がある。

4.2.（視覚からの）転用先の用例数

視覚から転用される「転用先の感覚」に注目し、言語毎に用例数をまとめたものが以下に示す表５である。

表５　視覚から転用される「転用先の感覚」別用例数

	日本語	中国語	韓国語	英語	スペイン語	ロシア語	アラビア語	タガログ語	計	%
視覚→「触覚」	1	21.5	2	14	4	6	6.5	3.5	58.5	25%
視覚→「味覚」	17	15.5	10.5	19.5	3	7	1	13	86.5	37%
視覚→「嗅覚」	11	16.5	10.5	18	2	7	8	13	86	37%
「視覚→の反例数　計	29	53.5	23	51.5	9	20	15.5	29.5	231	100%

今回の調査で得られた反例全てを100とすると「視覚→味覚」および「視覚→嗅覚」へは同程度に多く転用例が認められる。しかし「視覚→触覚」は日本語と同様、他の言語においてもあまり多く認められない可能性がある。

この点について詳しく、感覚別にみてみよう。

表６　「視覚→触覚」へと転用される比率

順　位	言　　語	%
1	中国語	25%
2	英語	16%
3	アラビア語	15%
4	ロシア語	14%
5	スペイン語	9%
6	タガログ語	8%
7	韓国語	2%
7	日本語	2%

表６の％も表３と同様に、１名もしくは２名の被験者全員が、全ての表現を可とした場合を100とし、算出している。なお、以下に続く表の％についても同様である。

「視覚→触覚」表現は、全体の用例数は「視覚→味覚」「視覚→嗅覚」に比べると少ないが、日本語と韓国語を除く他の言語（中国語、英語、アラビア語、ロシア語）においては一定数の反例が存在する可能性がある。中でも、中国語が25％と特に高い点に注目したい。

次に「味覚」への転用についてみてみよう。

表７　「視覚→味覚」へと転用される比率

順 位	言　　語	%
1	日本語	40%
2	タガログ語	30%
3	英語	23%
4	中国語	18%
5	ロシア語	16%
6	韓国語	12%
7	スペイン語	7%
8	アラビア語	2%

以上のように、日本語が際立って高く、次いでタガログ語、英語の順に反例が存在する。しかし、スペイン語とアラビア語を除く他の言語においても比較的多くの反例が存在する可能性がある。この傾向が今回調査の対象となった７つの言語以外においても同様に認められるのかどうか、今後詳しく検証したい。

それでは最後に、「嗅覚」への転用についてみてみよう。

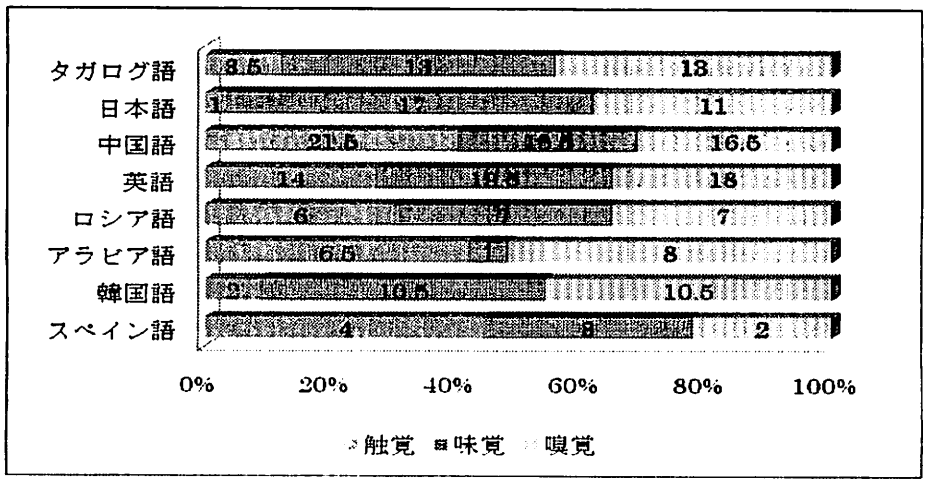
表８　「視覚→嗅覚」へと転用される比率

順 位	言　　語	%
1	タガログ語	30%
2	日本語	26%
3	英語	21%
4	中国語	19%
5	アラビア語	19%
6	ロシア語	16%
7	韓国語	12%
8	スペイン語	5%

「視覚→味覚」表現と同様に、上位を占めるのはタガログ語、日本語、英語、中国語の４つであるが、スペイン語以外の言語においても多くの反例が存在する。

以上、表６から８の結果をまとめたものが次の表９である。

表９　「一方向性仮説」の反例に関する感覚別割合



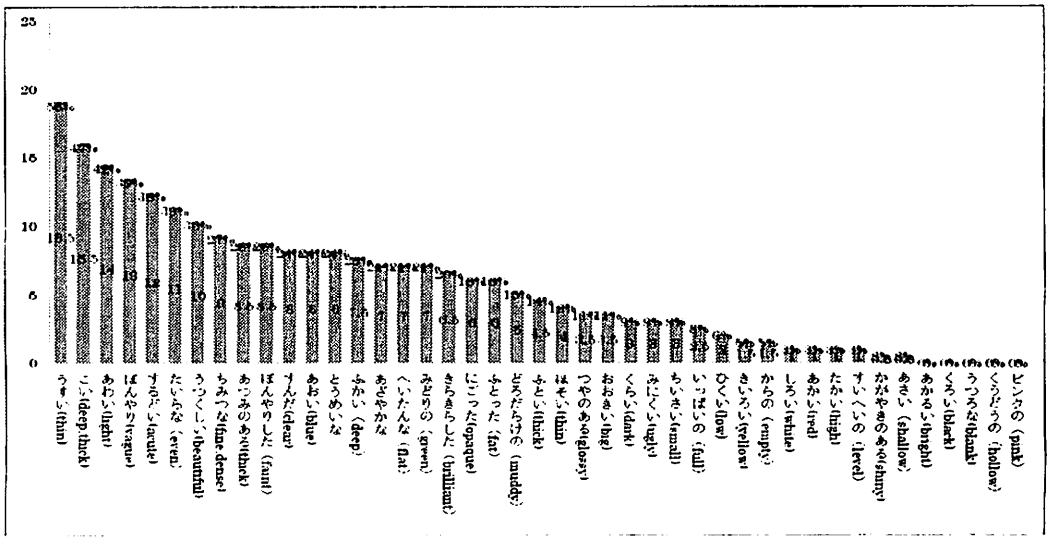
表中の数字は、反例の数を表す。どの言語においても「視覚→嗅覚」は一定数の用例が認められるが、「視覚→触覚」および「視覚→味覚」については、言語によって差

があることがわかる。

4.3.　「視覚を表す語」に注目して

一方「視覚を表す語」に注目し、どの語に多く反例が存在するかをまとめたものが以下に示す表10である。

表10　他の感覚へと意味転用される「視覚を表す語」が有する用例数および比率（中国語、アラビア語、英語、スペイン語、韓国語、タガログ語、ロシア語）



なお、この表10の％も、すべての被験者が「表現可能である」と答えた場合を100％として算出している。７言語中「うすい」「こい」「あわい」に相当する語においては、どの言語においても多数の転用例が認められる。一方、「あかるい」「くろい」「うつろな」「くうどうの」「ピンクの」といった語においては、どの言語にも全く用例が認められなかった。

4.4.　予備調査のまとめ

既に述べたように、従来の一方向性仮説では、視覚からは「聴覚」へのみ転用されると考えられてきた。しかし今回の調査では、７つの言語において「視覚 → 味覚」および「視覚 → 嗅覚」表現だけではなく、日本語においては認められなかった「視覚→触覚」表現も存在するという点が明らかになった。しかし今回はあくまでも予備の調査であるため、今回調査した言語を含め再び調査を行い、被験者を増やすなどして十分に検討する必要がある。

4.5. 日本語と他の言語共通に存在する共感覚表現

以下、日本語と他の言語ともに存在する共感覚表現とそうでないものを確認する。なお*印の表現については、表現可能かそうでないか、被実験者が断定できなかった例である。

まずはじめに、日本語と共通する反例である。

・**「視覚」→「触覚」表現**
・「するどい・てざわり（かんしょく）」：中国語、英語、スペイン語、*韓国語、アラビア語、ロシア語
・「たいらな・てざわり（かんしょく）」：中国語、英語、スペイン語、タガログ語、アラビア語、ロシア語
・**「視覚」→「味覚」表現**
・「あざやかな・あじ」：スペイン語（→例：高級料理）、*韓国語
・「すんだ・あじ」：中国語、タガログ語、英語
・「うつくしい・あじ（美味）」：中国語、タガログ語、英語
・「にごった・あじ」：中国語
・「ぼんやりした・あじ」：*韓国語、タガログ語、英語、ロシア語
・「あわい・あじ」：中国語、韓国語、タガログ語
・「おおきい・あじ（大味）」：*韓国語
・「あつみのある・あじ」：中国語、英語
・「こい・あじ」：中国語、韓国語、タガログ語、英語
・「うすい・あじ」：中国語、韓国語、タガログ語、ロシア語
・「するどい・あじ」：英語、スペイン語、アラビア語、ロシア語
・「ふかい・あじ」：韓国語、*中国語
・「ぼんやりした・あじ」：英語、タガログ語
・「へいたんな・あじ」：英語、タガログ語、ロシア語

・**「視覚」→「嗅覚」表現**
・「あざやかな・におい（かおり）」：中国語、韓国語、スペイン語、ロシア語
・「すんだ・かおり（におい）」：中国語、韓国語、タガログ語
・「あおい・におい（青臭い）」：中国語

・「とうめいな・かおり（におい)」：タガログ語、アラビア語、＊ロシア語
・「ぼんやりした・におい（かおり)」：中国語、韓国語、英語、スペイン語、タガログ語、ロシア語
・「あわい・におい（かおり)」：中国語、韓国語、タガログ語、英語
・「こい・におい（かおり)」：中国語、韓国語、タガログ語、英語、アラビア語、ロシア語
・「するどい・におい（かおり)」：英語、＊アラビア語、＊ロシア語
・「ふかい・におい（かおり)」：中国語
・「ぼんやりした・かおり」：英語、タガログ語

中でも「視覚」→「味覚」「視覚」→「嗅覚」表現については、他の言語においてもかなり多くの用例が存在する可能性がある。これらの表現について、各表現がそれぞれの言語においてどのような意味を表すのか、日本語と同種の意味を持つのかどうかについても今後調査したいと考えている。

4.6.　日本語には存在しない共感覚表現

次に、日本語には存在しないが他の言語においては存在する表現をまとめると以下のようになる。

・**「視覚」→「触覚」表現**
・「くらい・てざわり（かんしょく)」：英語
・「あおい・てざわり（かんしょく)」：英語
・「うつくしい・てざわり（かんしょく)」：英語、アラビア語
・「とうめいな・てざわり（かんしょく)」：英語
・「あわい・てざわり（かんしょく)」：英語
・「つやのある・てざわり（かんしょく)」：＊中国語、英語、アラビア語、ロシア語
・「ぼんやりした・てざわり（かんしょく)」：＊韓国語
・「たかい・てざわり（かんしょく)」：＊中国語
・「ひくい・てざわり（かんしょく)」：＊中国語
・「おおきい・てざわり（かんしょく)」：＊中国語
・「ちいさい・てざわり（かんしょく)」：中国語、英語

・「ふとい・てざわり（かんしょく）」：中国語、*アラビア語
・「ほそい・てざわり（かんしょく）」：中国語
・「あつみのある・てざわり（感触）」：中国語、*韓国語、*アラビア語
・「ちみつな・てざわり（かんしょく）」：中国語、英語
・「こい・てざわり（かんしょく）」：*韓国語
・「うすい・てざわり（かんしょく）」：中国語、スペイン語、タガログ語、アラビア語
・「ふかい・てざわり（かんしょく）」：中国語
・「からの・てざわり（かんしょく）」：中国語、英語
・「ふとった・てざわり（かんしょく）」：中国語、ロシア語
・「すいへいの・てざわり（かんしょく）」：ロシア語
・「きらきらした・てざわり（かんしょく）」：英語
・「ぼんやりした・てざわり（かんしょく）」：英語
・「へいたんな・てざわり（かんしょく）」：*中国語
・「どろだらけの・てざわり（かんしょく）」：中国語、*アラビア語、ロシア語

・**「視覚」→「味覚」表現**
・「くらい・あじ」：英語
・「あおい・あじ」：中国語
・「しろい・あじ」：中国語
・「とうめいな・あじ」：中国語、*韓国語、タガログ語
・「ひくい・あじ」：英語
・「ふとい・あじ」：英語
・「ほそい・あじ」：英語、ロシア語
・「ちみつな・あじ」：*韓国語、英語
・「たいらな・あじ」：英語
・「ふとった・あじ」：中国語、タガログ語、ロシア語
・「いっぱいの・あじ」：英語、タガログ語
・「きらきらした（かがやく）・あじ」：スペイン語、タガログ語、英語
・「どろだらけの・あじ」：タガログ語
・「みどりの・あじ」：中国語、英語、ロシア語

・「視覚」→「嗅覚」表現
・「くらい・かおり（におい）」：英語
・「うつくしい・かおり（におい）」：英語、タガログ語、アラビア語
・「にごった・かおり（におい）」：中国語、韓国語、*アラビア語
・「おおきい・におい（かおり）」：中国語
・「ちいさい・におい（かおり）」：中国語
・「ふとい・におい（かおり）」：英語
・「ほそい・におい（かおり）」：ロシア語
・「あつみのある・におい（かおり）」：英語
・「ちみつな・におい（かおり）」：英語、アラビア語
・「うすい・におい（かおり）」：中国語、韓国語、タガログ語、ロシア語
・「ふとった・におい（かおり）」：ロシア語
・「いっぱいの・におい（かおり）」：*アラビア語
・「きらきらした（かがやく）・におい」：タガログ語
・「へいたんな・におい（かおり）」：タガログ語、ロシア語
・「どろだらけの・におい（かおり）」：タガログ語
・「みどりの・におい（かおり）」：中国語、*韓国語、英語、アラビア語

日本語には存在しない「視覚→触覚」表現が、特に中国語において数多く存在する可能性があるという点に注目したい。またこれらの表現についても、各言語においてどのような意味を表すのかについて今後調査する必要があると考えている。

５．まとめと今後の課題

以上、本稿では、７つの言語（中国語、アラビア語、英語、スペイン語、韓国語、タガログ語、ロシア語）を対象とし共感覚的比喩の一方向性仮説に関する調査を行い、その結果について考察した。結果は、以下の６点にまとめられる。

１．今回の調査で最も多く一方向性仮説に反する例が認められたのはタガログ語である。しかし、２番目に多い日本語、そして３，４番目の中国語、英語までは数値的に大きな差は無く、日本語だけでなく複数の言語においても多数の反例が存在することが明らかになった。

２．「視覚→触覚」表現については、日本語と韓国語が７言語中、最も少ないのに対

し、中国語においては多くの反例が存在する可能性がある。しかし「視覚→味覚」および「視覚→嗅覚」表現と比較すると、「視覚→触覚」表現は他の言語においても用例数が少ない可能性がある。

３．「視覚→味覚」表現については、日本語が目立って多い。次いでタガログ語、英語、中国語にも比較的多くの反例が存在するが、スペイン語とアラビア語を除く他の言語においても、多くの反例が存在する可能性がある。

４．「視覚→嗅覚」表現については、タガログ語および日本語に多く用例数が認められる。英語、中国語、アラビア語、ロシア語、韓国語にも用例が認められるが、スペイン語だけは極端に少ない可能性がある。

５．７言語中、「うすい」「こい」「あわい」に相当する語においては、どの言語においても多数の転用例が認められる。一方、「あかるい」「くろい」「うつろな」「くうどうの」「ピンクの」といった語においては、今回の調査ではどの言語にも全く用例が認められなかった。

また本稿では、日本語と共通する共感覚表現とそうでないものを整理して示したが、前者が日本語と類似した意味を持つのかどうか、また後者がどのような意味を持つのかどうかについても今後詳しく検証する必要がある。

本稿全体の結論として、今回、調査の対象となった７つの言語には数多くの反例が認められる。従って、今後他の言語についてもさらに調査すべき必要性があることが確認できた。

なお本調査は、今後予定されている20言語を対象とした言語調査に先立つ予備調査である。現在、今回行った７言語以外に加え、さらに13の言語についても調査を進めている。各言語の被検者を一定数確保し、各ネイティブスピーカーのチェックを受けるなどして一方向性仮説について慎重に調査を行い、「言語普遍性」説が妥当であるのかどうかを明らかにしたい。さらに各言語が有する五感に関わる比喩についての個別的特徴をも探ることが出来ればと考えている。

注

(1) 本稿は、第３回　沖縄県日本語教育研究会（2007年3月8日）で発表した内容の一部をまとめたものである。発表の際、ご意見やコメントを下さった皆様にはこの場を借りてお礼を申し上げる。また、査読者の先生方、および琉球大学の副島健作先生には有益なコメントを頂き問題点のいくつかを改善することが出来た。こ

の場をお借りして厚く御礼申し上げる。なお、発表内容に関する責任はすべて執筆者が負うものである。

(2)「表現可能である」と感じられるが、やや新奇であると感じられる表現などである。これらの例については、今後慎重に調査する必要がある。

参考文献

池上嘉彦 (1985)『英語学コース第4巻　意味論・文体論』, 大修館書店.

楠見　孝 (1995)『比喩の処理過程と意味構造』, 風間書房.

国広哲弥 (1989)「五感を表す語彙－共感覚的比喩体系」『月刊言語』18-11, 大修館書　店. pp. 29-31.

瀬戸賢一 (1995)『メタファー思考』, 講談社現代新書.

―　(2005)『よくわかる比喩』, 研究社.

酒井彩加 (2003)「日本語の『共感覚的比喩(表現)』に関する記述的研究」, 博士学位論文, 名古屋大学.

籾山洋介 (1997)「慣用句の体系的分類―隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に―」,『名古屋大学国語・国文学』80, 名古屋大学国語国文学会. pp. 29-43.

安井　稔 (1978)『言外の意味』, 大修館書店.

山田仁子 (1993)「－言語は感覚の内視鏡－共感覚に基づいた形容表現の分析」,『HYPERION』40, 徳島大学英語英文学会. pp. 29-40.

山梨正明 (1988)『比喩と理解』(認知科学選書17), 東京大学出版会.

ウルマン, S. (山口秀夫訳) (1964)『意味論』, 紀伊國屋書店.

Williams Joseph M. (1976)"Synaesthetic adjectives :a possible law of semantic change", Language, 52:2. pp. 461-477.

(琉球大学留学生センター)

"Examination in" One direction hypothesis of 'Synesthesia metaphor'." : From the result of preliminary research on "Words indicating sight" in seven different languages.

SAKAI, Ayaka

Key words: : Synesthesia metaphor,・One direction hypothesis, Words indicating sight, Diversion of meaning,・ "Language universality" Phenomenon

Abstruct

In the past research, "One direction hypothesis" of "Synesthesia metaphor" which has grounded the idea that "man is physiologic universal" has been assumed to be one of the phenomena of "Language universality".

However, it is only English and Japanese that the research was conducted, and is the one insufficient as for the investigation of Japanese. Therefore, it is required to investigate whether it is a phenomenon that investigates other languages including English and Japanese, exceeds the difference of the language really, and is admitted together.

Sakai(2003)verified a Synesthesia metaphor in present Japanese based on a lot of examples, and obtained the conclusion that one direction of the metaphor is not found in Japanese. Then, the hypothesis" Various diversitys are found in the Synesthesia metaphor system of each language" is set up and verified in the main enumeration based on the result in Sakai (2003) for seven languages (Chinese, Arabic, English, Spanish, Korean, Tagalog, and Russian). The conclusion obtained by this enumeration is as follows.

1. It is in Tagalog that many examples contradicting one direction hypothesis were found by this investigation. However, there was no big difference in Chinese and English, and it is clarified that a lot of counterexamples are found in not only Japanese but also two or more languages.

2. There is a possibility that many counterexamples exist in Chinese about "Sight→touch" expression while Japanese and Korean, they are the present least in seven languages. However, "Sight→touch" expression has the possibility that the number of examples is small in other languages compared with "Sight→taste" and "Sight→smell" expression.

3. " Sight → taste " expression stands out Japanese where it is abundant. Next, comparatively a lot of counterexamples exist also in Tagaiog,English and Chinese, and there is a possibility where a lot of counterexamples exist in other languages except Spanish and the Arabic

4. Many examples are found in Tagalog and Japanese in "Sight→smell" expression. Only Spanish has extremely few possibilities though the examples are found in English, Chinese, the Arabic, Russian, and Korean.

5. There are many examples in words "thin" , "deep" , and "light" in any language. On the other hand, the example is not admitted in any language in this investigation in the words "bright" , "black", "blank", "hollow" , and "pink" at all.

Many counterexamples are taken of the entire in seven languages other than Japanese. Therefore, it was confirmed that there is a necessity to further investigate other languages in future. The main enumeration is a preliminary research that precedes the language investigation intended for 20 languages scheduled.

(University of the Ryukyus)